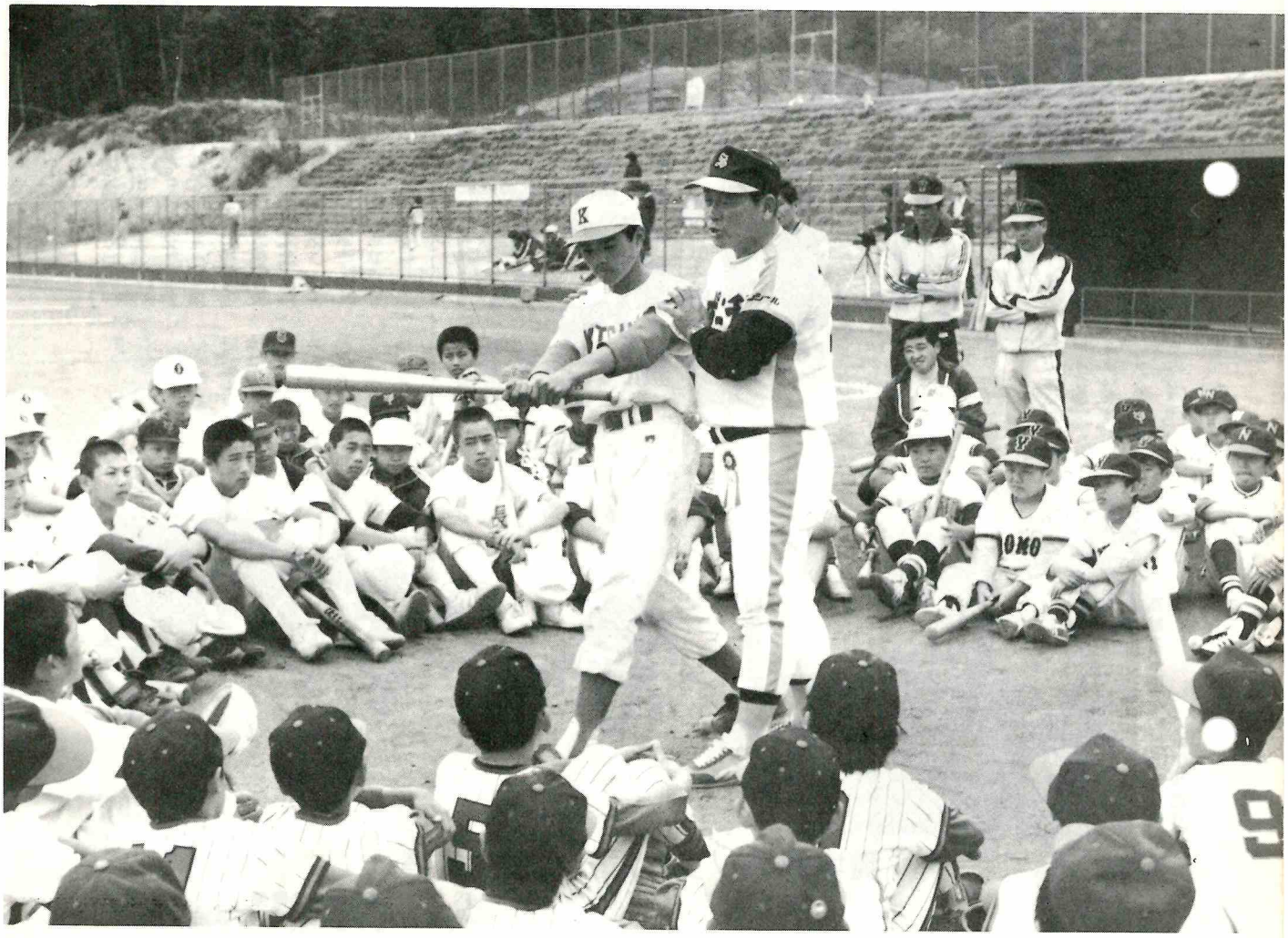
館報 おおくま

おもな内容

2面…町民体育祭
3面…清流・親子読書会
4面…文化祭・マラソン大会
5面…郡総体成績
6面…文芸
7・8面…みんなの広場

発行編集　大熊町公民館
印刷所　新栄社写真美術印刷



少年野球教室

プロ野球の名選手を講師に迎えた少年野球教室が十月十日（体育の日）大熊町営球場において開催された。

この野球教室は町、体協、スポーツセンターなど関係機関の共催で開かれたもので、郡内各町村から約八百名のチビッ子野球ファンが参加、体育の日にふさわしい行事となった。

コーチ役をつとめたのは田宮謙次郎（元大毋―現ロッテ）秋山登（元大洋）醐醍猛夫（元ロッテ）森中千香良（元南海）の四氏で、野球ファンにとっては、なじみの深い往年の名選手ばかりです。

「野球は体で覚えることだ、きょう習ったことを次の日から反復練習してほしい」と熱の入った指導、さらに軟式ボールを使っての基本プレーやピッチング、バッティングなど野球全般にわたっての手ほどきを受け、参加したチビッ子達は将来の名選手を夢見ながら熱心に練習に励んだ。

（写真はバッティングの指導を受ける、チビッ子野球選手）

町民体育祭でハッスル
熊町が二連勝を飾る

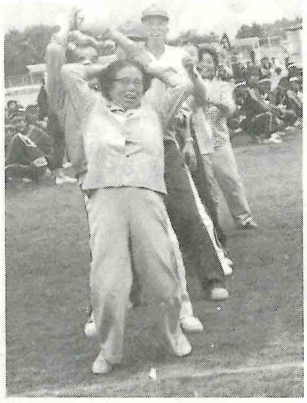
町民総参加による恒例の大熊町民体育祭は、九月七日大熊中学校庭において盛大に開催された。当日は絶好のスポーツ日和に恵まれ幼児から高令者にいたるまで大勢が参加、各競技をきそいあった。

団体種目では熊町部落が昨年度に続き二年連続優勝を飾り、部落民の団結と圧倒的な強さを見せた。なお熱戦を繰りひろげた部落対抗競技の成績は次の通りです。

優　勝　熊　町
準優勝　下野上
三　位　小入野

種目＼部落	野上	下野上	駅前	大川原	熊	熊川	小入野	町	夫沢
壮年ソフトボール	8	10	8	6	6	4	6	6	9
家庭バレーボール	4	7	5	2	8	9	10	6	3
玉入れ	5	2.5	2.5	6	4	8	9	10	7
婦人消防隊	3	7	2	4	8	6	9	10	5
消防訓練	6	10	2	8	5	3	9	7	4
綱引き	8	4	2	6	2	6	2	10	2
部落対抗リレー(女)	5	10	3	8	4	2	6	9	7
部落対抗リレー(男)	7	10	8	6	9	5	2	4	3
合計	46	60.5	32.5	46	46	43	53	62	40
順位	5	2	9	6	4	7	3	1	8

ぬきつ　ぬかれつの部落リレー

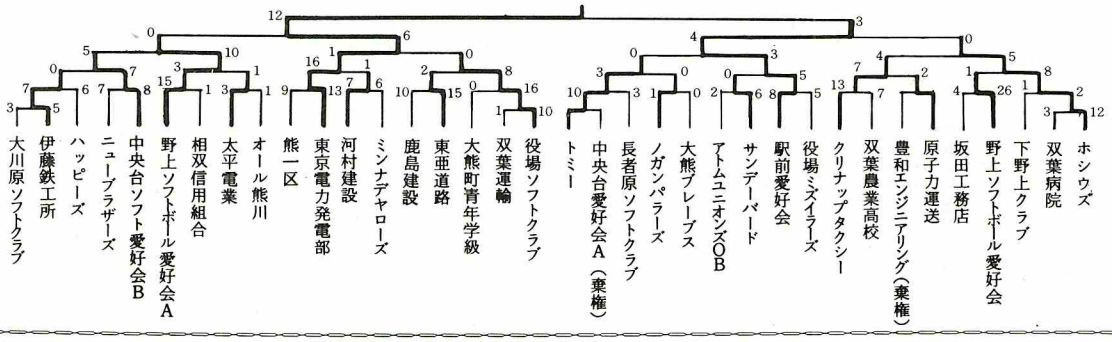


高齢者も腰をのばしてボール送り

団体種目で活躍する婦人消防隊

職場対抗ソフトボール大会成績

優　勝　東京電力発電部
準優勝　駅前愛好会



人事消息

大熊町教育委員

教育委員の木幡キサさんは九月三十日で任期満了となり退職いたしました。後任には渡辺典郎さん（野上三区）が選任されました。

今後は学校教育並びに社会教育の振興のため活躍されます。

親子読書会 学習ノートから

家庭教育学級生と親子読書会の方々を対象に県立図書館主任司書の浦井洋子先生を講師に招き「豊かな心を育てよう」と題して学習会が行われた。その概要を紹介します。

◆子どもの読書傾向について

現代っ子をみると一般的に面倒くさいことはさけたがる。本による知識をとり入れることを苦にしてはいないか。反面流行語には敏感であり、日本語の美しさ、読書の楽しさ、この意味を知っていないのではなかろうか。子どもの読書は低年齢化の傾向にある。本の読み方も軽読化され、思考力とか創造力に欠けている。

◆読書には二つある

①目的に合った本を探し、それを読み、自分のものとし、目的のために生かす読書……目的のための読書と

②気楽に読書を楽しむ……楽しみのための読書とがある。

子ども時代に本を読む楽しさをたっぷり味わっておかないと目的のための読書はできなくなる。

◆本との「出会い」はどこか

子どもの読書の好ききらいは家庭環境が左右する。子どもと読書との初めての出会いは、幼稚園・小学校の教師でなく家族の読書の姿である。日常生活の中にとけこんでこそ、子どもの生活の中にも読書の習慣が自然に入りこんでくる。子どもが初めて本と出会う場は家庭であり、両親は子どもの読書の手本である。

「もう字が読めるのだから自分で読みなさい。」「字を読めるのに本を自分で読もうとしない。」こんなことを耳にするが、本を読むということは文字を読むことだけでなく、書かれている事柄を頭の中でひとつの絵として組み立てながら理解する作業である。即ちイメージ化である。自分で読書する前に耳から話を聞いてその映像が頭の中に浮かびあがらせる。ことばのイメージ化の訓練が大切である。小さいときからお話や絵本の読み聞かせを毎日やってあげること。読み聞かせでイメージ化の訓練のできた子どもは物語の楽しさをたっぷり味わうことができ、楽しみの読書の下地ができた子どもである。子どもの要求や意見を親が代弁することは子どものイメージづくりの芽を摘みとることになる。

家庭で子どもは親の本を読む姿を見ている。本が身近かにある、母親が子どもに本を読み聞かせをしている家庭こそ、本好きの子どもになる。

清流

ときの流れ

館報編集委員 木幡キサ

明治生まれの老人も覚えがないという今年の冷夏と長雨、春以来丹精に育てた農作物も冷害となって、初秋の太陽もうらめしい感じさえします。過日、病院の一室に親せきを見舞った帰り、ドアを開けて廊下に出たとたん、私の父の名を声高らかに呼んで話をしているじいさんがいた。思わず立ち止まって耳を傾けた。話の内容は県立大野病院を誘致した当時のことを相手に説明しているのでした。耳が遠いのか声が大きかったので思わぬところで亡き家族の名を聞いたのでいささかびっくりしました。

こんなことがあってか、私は終戦後の昭和二十四年、食糧難と病気に苦しむ当時の寒村の姿を思い出しました。いま国勢調査で大熊町の人口は？のクイズが出されていますが、当時の大野村の人口は何人だったろうか、多分三千二百人位だったと思う。財源の乏しい村財政の中で、当時の斎藤村長（現存）始め村議や村民は、村有財産の殆どを処分して絶えざる努力をした結果、県立大野病院の誘致を見たのでした。場所をめぐって富岡と誘致合戦が行われ、是非富岡にと町議の方々が陳情書を持って何回か父を訪れたものでした。

戦後初めての公選で県会に当選された父には、仲々板ばさみになって精神的苦労も大変だったろう。

年甲斐とでもいいましょうか。今になって分かるような気がします。当時、出県するには常磐線の普通列車だけで、岩沼乗り換えで行く唯一の線でした。野上の山里からは歩いて一時間、四時半に乗るのには三時起きして出かけるわけです。嫁の私は二時半に起き、麦飯に梅干しのおにぎりをこしらえ送り出したものでした。

寒い時などは、外はまだ星空に霜が真っ白でつらいなあと思った事も度々ありました。このいろんな苦しさをのりこえて県会で誘致を決断させたきっかけは何であったろうか。それは目に入れても痛くない程、可愛がっていた孫が梅雨時に消化不良で亡くなった事でした。丁度六月県会で帰宅できず、三日後に福島の桜桃を土産に孫の重い手を合わせた父の姿が思い出されます。大野村にもよい医者がいて治療できたら命をとりとめただろうな、と無医村の無念さを嘆かれたのでした。現在、県立大野病院が地域医療の殿堂として、町内はもとより地域住民のお役に立ち、内科・整形外科・産婦人科と多くの命を救い治療に信頼を集めている姿を見る時、中に働くお医者さん、看護婦さん始め従業員の方々どうぞ健康で頑張って下さい。有難うございますと祈らずにはいられません。小児科も耳鼻科もと地域住民は要望しております。地域住民の与論の実現近からんことを念じて止みません。いつの世も決断のきっかけは努力しているものにあるような気がします。

親子が集い 楽しい家庭教育学級

家庭教育学級は、子どもの幸せのために親が学習をする場ですが、先日は親子百二十名が四倉子どもの村に集い、野外活動を行いました。この日は、ようやく青空に恵まれ、豊かな自然の中で、子ども達と普段できない野外での活動を、楽しく無事に過ごすことができました。これも学級生のご協力のたまものと思います。

幼少期における心身の発達は、野外での活動的な遊びの中にこそ生まれる大切なことだと思います。

母親が一歩はなれ、また絶えず心を配る愛情こそ大事なことだと痛感いたしました。教育ママ、放任ママと片寄ることのない、中道を行く母親になるためにも、この家庭教育学級の活動を通して、自分自身をみがいて行くべく努力をしたいと思います。

そして、野外活動に参加した子ども達のキラキラと輝いた瞳、はだしで砂をける小さな足、親と子の心の交流など豊かな人間関係が広がってゆく明るい笑顔は、何よりも嬉しく心に残り忘れることが出来ません。

子どもをよりよく育てるためにも、この家庭教育に多数の方が参加し、楽しい「家庭づくり」「学級づくり」をいたそうではありませんか。

家庭教育学級長　小林かおる

スポーツ民謡で楽しい健康づくり

去る九月十九日、相双地方の婦人団体研修会が大熊町公民館において開かれた。講師にはスポーツ民謡会の第一人者である郡山市の鈴木博先生を招き、人の和と健康づくりと題して学習された。また日本人の心のふるさととして民謡やその踊りが見直されている折、スポーツ民謡を踊り、仲間づくりや健康づくりに役立てた。

青年学級で奉仕活動

道路の危険な所には、ほとんどカーブミラーがついている。最近心もとない者にこわされて、という声が聞かれる。こんな折、町青年学級生は奉仕活動として、町全域のカーブミラーの清掃を行い、ドライバーから感謝されている。

町内から交通事故をなくすためにもみんなで大切に使用したいものです。

文化祭 11月1・2・3日 会場　大熊町公民館

書道・絵画展
小中学生・高校生・一般の方々の作品（高令者も含む）を展示

生花展
流派をとわず学生・一般の方々の作品を展示

盆栽展
盆栽水石愛好者・一般の方々の作品を展示

出品申込
出品される方は十月二十五日まで公民館へ

応募条件
町在住及び町内に職を有する人

出品物の搬入
十月三十一日　午前九時から十二時まで公民館へ

出品物の搬出
十一月三日　午後三時より

町民マラソン ジョッキング大会

とき　11月2日（小雨決行）
ところ　大野病院前　午前10時スタート

マラソンの部
8kmコース…一般男子29才まで
6kmコース…高校生男子
4kmコース…一般男女・高校生女子
中学生男女

ジョッキングの部
歩け　走れ　歩け！　自分のすきなようにして下さい。
4kmコース…中学生から一般成人まで
要　　領…予め自分の体力に合わせた、自分なりの歩走時間を定めスタートする。ゴールにおいて自分の定めた時間に一番近い者が上位成績となる。

参加申込
10月28日まで所定の用紙で公民館へ
詳しくはお問い合わせ下さい。

女子バレーが五連勝
郡総体　総合では三位

第十八回双葉郡総合体育大会は九月二十三日双葉町において開催され、陸上競技ほか十五種目に熱戦をくりひろげた。今年度はバトミントンも新たに加わり、各町村とも一段と力が注がれ、白熱したプレーを展開した。大熊町は女子バレーが五連勝、家庭バレーが三連勝を成し遂げバレーボールでは圧倒的な強さをみせた。また総合ではわずかの点差で惜しくも三位にとどまった。なお上位成績は次の通りです。

＜大熊町の上位成績＞

女子バレーボール	優勝	
家庭バレーボール	優勝	
バスケットボール	準優勝	
バトミントン	準優勝	
卓球男子	準優勝	
庭球男子	準優勝	
相撲	準優勝	
陸上競技男子	準優勝	
壮年ソフトボール	三位	
銃剣道	三位	
陸上女子	三位	

＜総合＞

優勝	浪江町	一〇一、五点
準優勝	富岡町	九一点
三位	大熊町	九〇、五点
四位	双葉町	八五点
五位	楢葉町	六九、五点
六位	広野町	三八、五点
七位	川内村	三三点
八位	葛尾村	一九点

五連勝を果した女子バレーの顔顔

野上諏訪太鼓
新しい衣装で継承

諏訪太鼓の解説につづき町長、地元区長のあいさつで幕を明けた正調諏訪太鼓継承の祭典は、きらめく星空のもとで八月三十一日盛大に催された。大観衆には懐かしさゆえにむせぶ光景も見受けられたし、ジーッときき入る姿もあった。

夜景にひときわくっきりと浮き出した新装の衣装は、むしろ謹厳さをしのばせているかのようであった。また今年から神楽の舞いが披露され、神前に奉納され、古来芸能にふさわしい祭典となり、大きく期待されている。

なお守る会では継承を記念して「野上よどもり小唄集」「正調諏訪太鼓録音テープ」をつくっており、ご愛用者には提供するとのことですのでご利用下さい。

立派にできた諏訪太鼓の衣装

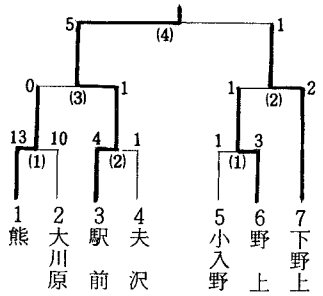
ダンス教室

期日　十一月二十六日から十二月四日まで
午後六時三十分開講
場所　大熊町公民館
対象　ダンスを愛好する青年男女五十名とする
初心者を歓迎します
申込　大熊町公民館　志賀
（電話二〇六五番）又は
大熊町役場　末永
（電話二一一一番内線二一九）へ
青年会

部落対抗野球大会
優勝は駅前

昭和五十五年度部落対抗野球大会は、去る十月五日　大熊町営球場をメイン会場にして開かれ、七チームが参加し熱戦が繰りひろげられた。なお成績は次の通りです。

優勝　駅前
準優勝　下野上
三位　熊
三位　野上



町民憲章

健康で楽しく働ける、豊かなまちをつくりましょう。
みんなで助けあい、明かるいまちをつくりましょう。
きまりを守り、平和な住みよいまちをつくりましょう。
自然を愛し、きれいなまちをつくりましょう。
進んで学び、香り高い文化のまちをつくりましょう。

文芸

詩

うちのインコ

熊小六年　渡辺　真弓

うちのインコはおもしろい
ブランコに乗ってピーピー
ボールをころがしてピーピー
水をのんでピーピー
えさを食べてピーピー
いつも一人でおしゃべりしている
うちのインコはかわいそう
一人でなかまをさがしてる
かごの中をよちよち歩き
いつも一人で遊んでる
いつも一人でないている
かわいい友だち
見つけてやりたい

短歌

飯田　良江
両の手で眼こすりし子らもありラジオ体操集へる朝に
怠りてわが庭の芝生長からむ散水のホース芝生にうずもる

中山　貞夫
昼の庭に流るるショパンのピアノ曲詠う子等の声の間に間に
競技終えし娘はさわやかな笑みを見せデパートの中友と二人で

鎌田　清衛
スピードスプレヤーの風圧に耐えて羽蜉蝣の前へ前へとおぼろげに翔ぶ
今日の業早や終へ釣りにと心急ぎ休みもせずに畑の靴はく

川木　裕子
今朝つみし小鍋の中の莢豆は犇きあいて青く煮えゆく
庭すみに父の植えたる紅ばらの散りにし今も掃きがてにある

松本　ミヨ子
会津野に孫らたずぬてひとり来ぬ昔日の影大木の下
豪雪を想わすものは何もなく今を盛りの花しょうぶ園

高桑　重乃
春去ればさかりに咲きしなでしこの枯れし花枝今日はきりいる
梅雨空の今日も降りつぎ移植せし朝顔の苗の立ち返りきぬ

俳句

菅野　ミヨ
紫陽花の色を映して水速し
若鮎の姿を賞でて箸をとる

結城　千代
紫陽花は雨そそぐほど鮮かに
郭公の声つまづいて鳴き去れり

武内　よね子
長痛みの娘の病窓の蝉の声
山菜を荷造る母や腰まげて

河西　かつ
葉がくれに胡瓜大きく育ちけり
母思う日ぞさなぶりの柏餅

永井　善子
梅雨入りの宣言よそに若葉風
夏休孫のいたづら更にます

鎌田　光子
梅雨寒し父子向ひて将棋指す
ゆえ知れず割れゆく梨や梅雨明けず

飯村　洋子
鮎の川雨の波紋を流しゆく
ポストの道に要求米価あり

川木　裕子
梅雨晴間今日ぞと干せり蒲団まで
額の花里の厠のほとりなり

猪井　静枝
足萎へし夫を支へて梅雨の夜
紫陽花に伊豆の夕べのほの灯り

中山　安子
給桑をすまし良夜はわれのもの
一斉に頭もたげて蚕の眠り

佐久間　信子
野の牛の聞き耳立ててほとぎす
いにしえの紫ひきて沢あやめ

渡辺　政美
諸行無常々住座臥に明易し
バラ散るや谷のなかばを蝶わたる

民話

羽黒の大蛇

「一に唐神、二に羽黒、三に坂田の空堤」といって相馬の国には三つの大きなつつみがありました。

その羽黒のつつみは双葉町山田にあるのですが、わが大熊町大字下野上字北向のすぐ近くにある大つつみなのです。水は双葉町に流れますが、野上、下野上の人々に大へん関係があるのでした。

春になると今でもぜんまいの宝庫です。秋はマツタケやその他のきのこがたくさんとれました。冬になるとたきぎをとりました。ずるい人は材木まで伐りました。

ある年の春のはじめごろでした。毎年のことながら野上の人たちはぜんまいとりにでかけました。北向の仁助じいさんも人にまけないように朝早くでかけました。うっそうと茂った松の木の下の山道を沢に向って下りていきました。所が今までなかったのに道を横切って大きな材木が転がっているのです。仁助は持っていたかまを材木にちょんとさしてまたごうとしました。するとその材木が動き出しました。へんだなと思って顔をあげてみてびっくりしました。大蛇が仁助をひとのみにしようと大きな口をあけてまっているのです。仁助はキャッと大声をあげて今来た道を一目散に逃げ出しました。どこをどう通ったか覚えていません。家につくとバッタリと倒れてしまいました。

家の人は何があったのか全くわかりません。床に寝かせました。仁助はスヤスヤと眠ったかと思うとガバッと起き上って「オッカネエー」と大声を出します。医者にみてもらってもどこも悪くないといいます。こうして三ケ月ばかり寝ていました。よくなった時羽黒の大蛇の話をしました。

恐ろしいもの見たさに人々は三人、五人とそろって羽黒にでかけました。羽黒は静かなつつみでした。

「向う岸に大きな材木が浮かんでいたっけ、あれが大蛇なのかな」という人もいました。

（小高森老人クラブの人から教えていただきました。）

庭球大会

十一月二日　町営テニスコート
軟式　男女　各ダブルス
硬式　男女　〃　及シングルス
申込　十月三十日まで参加費五百円を添え公民館へ

みんなのひろば

ささやかな便り

最近はどこの家でも電話が普及して、書くことが大へん少なくなった。しかし、いろいろな面を考える時、ちょっと書き送った為にその人のやさしい心遣いが表われ嬉しくなる時もある。

つい先日、嫁いだ娘から、「お母さん、荷物といっしょに手紙が入っていたでしょう。私あの手紙を読んで本当に嬉しくなったわ。お母さんがこれほどまで私達のことを心配してくれて……。」と。

またある時、実家の年老いた母へ、電話で用が足りることであったが、久しぶりに手紙を書いてみた。いくら親子でも面と向かっては、てれくささもあって、充分に言えないこともある。手紙だと思っていることを詳しく伝えることが出来る。二・三日して母から電話があり、「本当に嬉しかったよ。何よりの励ましになったよ。」と言ってきた。

またある時、主人の留守にちょっと出かける急用ができ、メモ的に走りがきしておいた。主人は何とも言わなかったけど、帰ってきた時のひととき、メモを見て心が安まったのではないだろうか。

また逆に、私がよその方から手紙やハガキをいただいた時、相手の方の心配りや、やさしさがよくわかり、ひどく有難いと思うことがしばしばある。

さて、どんなに進歩した世の中でも、ささやかなあたたかい心遣いというものは、誰でも嬉しいものである。

秋も次第に深まり、虫の音も聞こえる静かな夜長を ちょっと便箋を出して身近かな人に一筆書いてみることもよいのではないでしょうか。

心と心が通じあい、交わりを深めるにはよい季節でもある。仕事から疲れて帰った時、知人や子ども達から、やさしい便りが届いており、それを読んでいる主人の様子を見るにつけ、また年老いた両親が息子や娘たちからの便りを読んでいる笑顔を見るにつけ、是非ともちょっとのひまをみつけ、書く心がだいじだと思う今日この頃である。

大川原 一主婦

天明のききん

天明三年（一七八三）今から一九七年前奥羽地方は大凶作であり、わが相馬藩は二分作であった。今年のように夏寒く小雨がふりしきり、稲は実らなかった。四年、五年、六年と四年もつづき人口は一万八千人が餓死逃散（逃げ出す）した。

それから五十年百姓も藩も一生けんめい働いた。天保四年（一八三三）五年と又々大凶作となり、四年には一分作にもならなかった。しかし人々は天明の凶作にこりて餓死囲いを持っていたし、藩も相当の準備があったので一人の餓死者も出さなかった。

私は今どき天明天保のような飢饉はないものと思っていた。品種も進んでいるし技術も向上している。しかし今の所天明よりはよいとは考えられない。全然とれなくても餓死することはないだろうが農民にとっては大打撃である。我々の力ではどうにも致しかねるが私達は天保時代の人々に習う必要がないだろうか。来年豊作とは誰も断言できない。歴史はめぐるという。みんなで考えてみましょう。

（松本）

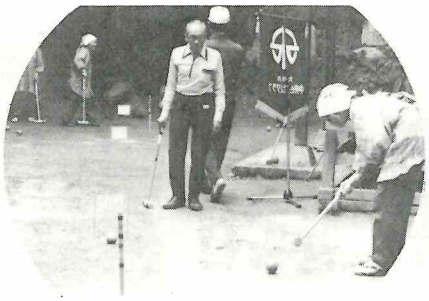
敬老の日に

私の父は七十五歳になりますが、健脚で鹿島町から私の所まで自転車に乗って遊びにきます。三日位遊んでまた自転車で帰ります。

私のまねの出来ないことは、原町の農蚕高校を卒業した年から、現在まで約六十年間、日記を書き続けた事です。暇のある身体ならともかく入婿で頑固な祖父母に仕え、三町歩余りの田畑と百グラム程の養蚕で農業を営んでおりました。夜になると裸電球の下で、居ねむりをしながら、疲れた身体で日記を書いておりました。私たち姉妹は忙しい父が坐って書いている時を見はからって、すまないなあと思いながら夏休みの友等、わからない所を聞きにいったものです。一度も叱られた事のないやさしい父です。五十四冊ほどの日記は土蔵の二階にしまってありますが、汚いからと掃除する時すてたらしく三冊ほどなくなっており、がっかりしていました。家族・親せきなどの出来事、その年の米の収量や値段などが書かれております。大きな出来事やニュースを抜すいして子ども達に自分の過去帳として一部ずつくれるんだと言って書き出してきたのを見ましたら「大正十二年一月三日予の定めなり」ということが抜すいされておりました。定めとは現在の結納のことです。父は現在も頭の体操だといって短歌をつくったり、本を読んだりしております。長い間同じことを続けることは本当に大変なことだと思います。この父がボケないでいつまでも長生きさせてやりたいと願う敬老の日です。

新町 木下千代子

クロッケーで体力づくり



中央台老人クラブ（鈴内喜子衛会長ほか会員五十名）では、年間計画にもとづき保健衛生や教養に関する学習、歌や踊りなど娯楽に関する行事を盛りたくさん実施している。今月は老人クラブを結成して十五周年目にあたるということです。情報第二〇号も発刊、会員に配布し皆んなから喜ばれている。また、十月十日（体育の日）はクロッケー大会を開き和気あいあいと腰のばし運動を楽しんでいた。

初秋のひととき

運動会があと一週間後にせまって、私の学校でも、一段と練習に熱が入ってきた。今日は、台風が去った後のフェーン現象か、温度計を見ると、気温が三十度、湿度七十五％、校庭で直射日光の当たる所はものすごい熱気である。その中での練習は、子ども達にも、決して楽なものではないが、みんなよく頑張っている。

鼓笛隊の練習が始まった。大太鼓・中太鼓・小太鼓・シンバル・指揮棒と、どの子どもの顔も汗で真っ赤になっている。そんな時、ふと私が小学生だった頃の運動会を思い出した。今のように、運動着もそろってはいないし、鼓笛隊などというものもなかったが、障害物競争・札合わせ・騎馬戦など、今と同じ種目もあり、額に汗して頑張ったことが思い出される。今の子どもと同じように、いや、それ以上に、一つ一つの競技に胸おどらせ、その勝敗に一喜一憂していたことが脳裏にありありと浮かんでくる。さらに、昼休みには、校庭の一角に、さながら縁日のごとく出店が立ち並び、綿アメ・トーフのミソでんがくなどが売られており、それらを買って食べることも、何よりの楽しみであった。当時は、楽しみと言っても何もない時代であったので、学校の行事であるばかりでなく、地域の一大行事でもあり、最大の娯楽であったと思われる。

そんなことをいろいろ考えながら、運動会の終わりに歌った歌、「勝ちたる者も、負けたるも、皆うちつれてあすよりは、今日の楽しか語らわん……。」と一人口ずさんでいるうちに、鼓笛隊の太鼓の音も笛の音も全く耳に入らなくなってしまっていた。ふと、「先生」と言う声に、「はっ、」と我に返ってみると、子ども達が、「何を歌っているの？」とまわりにたくさん集まっていた。どの顔も汗にまみれていたが、その目は生き生きとかがやいていた。

この子ども達にも、幼き日のよき思い出をたくさんつくってやらなくてはと心に決し、また、声をはりあげる私である。

渡辺　俊一

ふるさとを思う

吉田　暉

故郷を離れて五十年、七十二歳の今になっても「しろしさーん」「吉田先生ー」とどこからともなく嬉しい声がとんでくる。いとこだ・同級生だ・教え子だ。それが俺のふるさと大熊町だ。山も小川も野の花までが「よく来たなあ」とあたたかく迎えてくれるような気がする大熊町である。「生まれ故郷はいいなあ」とつくづく思う。実家の親も兄もとうに死んでしまったのに甥が嫁がその息子が嫁女がみんな気立てもやさしく喜んで迎えてくれる。だからまっさきに生家に行く。心がなごむ。仏壇にぬかづくと父・母・兄のやさしい姿が瞼に浮かんでくる。

小学校の同級会も、ささやかながら毎年集まっては童心にかえって昔を語り、あの頃の唱歌をうたって終日談笑し、なお別れを惜しむ。志賀定太郎君・吉田農夫雄君・木幡トリさんと櫛の歯が欠けるように他界して淋しくなって来るのはいなめない。

戦後相農に十二年・小高農工に六年・小高工業に七年、その頃の教え子が今大熊町の壮年層を形成して各分野に目ざましい活躍をしている。その顔々が瞼にゆきかう。

牛の共進会に入賞した、教え子の名が新聞に出ると我が事のように嬉しく、お祝いの便りなどを書く。

原発が出来る、総合グランドの数々の施設々備・素晴しい役場・公民館・学校・病院の偉容が大熊町の繁栄を象徴するかのようだ。坂下ダムも景勝の一つ、わがふるさとは生々発展して止どまるところを知らない。「私の実家は大熊です」と大きく胸を張っていいたい。

小学校時代、村社諏訪神社を中心に村の行事が行われた。神前に厳かに奏する祝詞が心の奥にやきつく。社前に奉納する獅子舞・村人を湧かせる奉納相撲、特に招魂祭に松本治郎助先生・石田宗清さん・林忠定さん、あの三人の凛々しい陸軍将校の勇姿には強く引きつけられ憧れた俺だった。懐かしい鎮守の森だった。昔ながらの玉の湯も郷愁を誘う数々の思い出が去来する。一年に一度は風邪で学校を休む俺だったが、師範学校に入ってからは無欠席で卒業できた。夏休み中熊川浜で海水浴をして鍛えたおかげだと今も信じている。今枕辺で農夫雄さんの「苦麻川」幸一先生の「野上の里」という民話集を面白く読ませてもらい郷愁に浸る夜毎である。わがふるさと大熊よ、更に幸多かれと祈る。（旧姓松本、元教員）

（筆者は大字下野上通称焼山松本家の四男として生れた。長兄直清氏は大熊町初代助役を勤めた。筆者は福島師範学校卒業後県内の小学校相馬の高校教員を勤めて定年退職。小高町史編集委員各種団体長を勤めている。）

編集後記

◆今年はこれまでにない冷夏に見舞われ、水稲の被害も戦後最大とまでいわれており、心いたむ昨今です。謹んでお見舞申し上げます。

◆館報一一二号をお届けいたします。ご愛読下さい。　毎回、町民の皆様からたくさんの原稿をお寄せいただき、みんなの広場を埋めつくしておりますが、紙面の関係で一部割愛させていただきましたのでご了承下さい。

◆十月も半ばを過ぎ、ひと雨ごとに寒さ感じる季節となりました。みんなで体を鍛え、健康で楽しい家庭を築きましょう。

◆公民館では十月十日の体育の日を中心に各種のスポーツ大会や親子登山、親子野外の集いなど、盛りだくさんの体力づくり運動を企画、実施しておりますのでお気軽にご参加下さい。

◆館報の原稿をお寄せ下さい。要領は四百字詰原稿用紙一枚程度で。

① 主張、産業、教養、文芸に関するもの何でも結構です。

② 政治的な色彩を帯びたり、個人非難に属するものでないこと。